

---

# 僕が広げた両腕の中で

蒼惟 宙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕が広げた両腕の中で

### 【Nコード】

N2237D

### 【作者名】

蒼惟 宙

### 【あらすじ】

僕には好きな子がいる。だけどその子は、僕と同じ男の子・・・

## #・1

「ねえ、明純<sup>あずみ</sup>？」

僕は重くなつた瞼を持ち上げ、夢うつつに声がした方を見た。

「次、隣に移動だよ？」

「…ああ。そうだね。ありがとう、菜月<sup>なつき</sup>。」

そう言くと、菜月は無邪気な笑顔になった。

早く早くとセーターの袖口を引っ張る姿に、なんだか母性本能の様なものが芽生える。感覚的には、兄だろうか。

「もお菜月、そんなに引っ張ったら伸びるでしょう？」

「だって、明純がゆっくりなんだもん。」

ぷくつと頬を膨らませる。

16にもなる高校生にしてはかなり幼さが残るこの子、菜月は、比例した様に背が低く、先月の体力測定で155cmという何とも可愛い結果が出た。

本人はそれなりに気にしているらしく、毎日牛乳を飲み、尽力している。

お菓子が好きで、毎日の様に食べているのに全然太らず、体重は約35Kgと軽い。

『明純っっ。』

いつもニコニコと笑っていて、人懐っこい。

小さいときからずつとそう。

泣き虫で、何にでも一生懸命で、明るくて、笑顔が………可愛い……

「明純？」

はつと声がした方を見ると、菜月は首を傾げていた。

「あ、ごめんね。行こうか。」

「うんっ」

満面の笑みで答えてから、菜月はスキップして教室を出た。

「・・・まったく・・・」

人の気も知らないで・・・

僕は思わずふふつと笑ってしまった。

「早く〜!」

「はいはい。」

僕、よしだあずみ吉田明純16歳。

いわたなつき幼馴染の岩田菜月16歳に片想い中です。

「吉田君たちって、いつも一緒にいるよね。」

掃除の時、箒で教室の床を掃いていると同じ班の女子が話しかけてきた。

彼女とは何度か話したことがあるので、あまり戸惑わなかった。

僕は比較的女子が苦手だ。

「ん？うん・・・」

「あれ？たちってだけで誰か分かるの？」

自分から訊いたにも関わらず、彼女は目を丸くする。

「え？菜月のことじゃないの？」

そう言っていると、面白そうに彼女は笑った。

「やっぱりねー。仲良いんだ？」

「まあ・・・」

「ねえ、いつから仲良いの？」

「えっと・・・幼稚園入る前・・・くらいかな。」

すっごくいいと言って、彼女ははしゃいだ。

「てかさ、吉田君ってモテるじゃん？」

「え、そうなの？」

「そうだよお。なのにさ、女の子と歩いてるとこ一回も見たこと無いしー。」

女の子苦手なんだよね。なんて、彼女に向かって言えないか・・・。

「うん・・・まあ・・・」

「好きな子とか、いないの？」

「えっ・・・」

その言葉に、僕はどきつとした。

彼女は目をきらきらさせる。

「え、なに？！いるの？！」

「い、いない・・・」

「うそうそ！今ちよつとどきつてしたでしょ！ね、誰？秘密に  
とくしさー、教え」

「こらーっ、そーじしろよ、そーじっ！」

ちようど僕のクラスの担任である女性の教師が入ってきた。

「もおせんせータイミング悪い。今ちようど事情聴取中だったの  
にー。」

「そういうことはやるべきことが終わってからー。ちゃっちゃと終  
わらせちゃってよー？先生今日用事あんだから。」

「デートですかー？！」

「ばかもんっ。」

「きゃーっ」

・・・女子って怖い

僕は掃除を再開した。

「好きな子・・・か。」

僕は後片付けをしながら、くすつと笑みをこぼす。

「あーずーみーっ！」

鞆を手に取ると、教室の入り口で菜月が満面の笑みで手を振って  
いる。

「そーじ終わったー？」

「うん、終わったよ。」

「じゃ、帰ろうよーっ」

「・・・そうだね。」

菜月に腕をひかれ、教室を後にする。

「今日ねー、家で焼肉するのっ。母さんが、たくさんお肉あるから  
あっちゃんとも呼びなさいって！」

「あ、そっか・・・分かった。」

僕はちゃんと返事をしたつもりだったが、菜月は首をかしげた。

「どしたの？」

「ん？なんで？」

「だって明純、元気なさそーな声してるよ？」

僕はまたどきつとした。そんなに、分かり易いだろうか？

「なんでもないよ。」

「ホントにいい？」

「うん。」

僕が微笑んでみせると、菜月はぱちりとした目で少しの間僕をじっと見上げていたが、やがて笑って「そっか」と言った。

・・・いつかは、言わなければいけないだろうか・・・

# 3

・・・僕にどうしろと？

「ねえ、明純く、入らないの？」

「う・・・ん・・・」

ここは菜月の家。

家族で呼ばれて、母さんと僕と姉さんは岩田家で焼肉をご馳走になった。

今、母さんたちはリビングで話をしている。

そして僕と菜月は・・・

「ねえ、嫌？」

「い、嫌なわけじゃ」

「何やってんのあんたたち、お風呂場の前で。」

廊下で押し問答していると、姉がいつのまにか近くに立っていた。

「あ、さっちゃん聞いてく。」

「なあに？」

姉は昔から菜月を自分の弟みたいに可愛がって甘やかす。

「あのね、明純がね、僕と一緒に風呂は入ってくれないの。」

「まあ、そうなの。ちょっとアズ、あんたなんで菜月ちゃん入ってあげないの？！」

・・・この豹変ぶり。

「ほら見なさいよ！菜月ちゃんのこの子犬のような瞳！」

そこ？

「お風呂ぐらい、つい最近まではしょっちゅう一緒だったじゃない。」

「

つい最近は一年前も入るのだろうか？

「明純く。」

「アズ、何恥ずかしがってるの？そりゃあ菜月ちゃんは可愛いけど、同じ男の子じゃない。裸の付き合いしなさい。」



姉ちゃん・・・それはちょっと・・・

突っ込みたいことはたくさんあるが、突っ込むとどうなるか分かったものではないので承諾する。

「・・・分かった。菜月、入ろうか。」

「わーいっ」

「・・・。」

可愛い・・・

「良かったねー菜月ちゃん。じゃ、アズ、ちゃんと洗ったげなさいよ？」

そう言くと姉はすたすたとリビングに戻ってしまった。

「・・・マジかよ・・・」

「ほらほら明純！」

「あ、うん・・・って早っ！」

菜月はもうすでに服を脱ぎ終わり、お風呂場に足を踏み入っていた。

「・・・ああ・・・」

大丈夫だろうか、僕。

上せないようにと祈りながら、僕は服を脱いだ。

「ほら見て見て！今日は泡のお風呂」

「ほ、ホントだねー。」

僕は一瞬イヤな予感がした。が、それを振り払って入っていった。

嫌な予感は、別のところでの中した。

「お風呂楽しかったね」

「そうだね。」

なんとか上せずには済んだものの、泡を楽しむ菜月が暴れて大変だった。

まあでも、慣れたものだ。

「あら、やっと上がったのねー。お風呂どうだったナツ？」

「気持ちよかったよ」 明純といっぱい泡で遊んだの！

「そう、良かったわね。あっちゃん、ありがとね。」

「あ、いえ・・・」

まだ若い菜月の母親が微笑む。

リビングを見渡すと、母と姉の姿が無かった。

「あ、あの・・・」

「ああ、2人ならこれから映画見に行つて、明日から三連休だから旅行に行くつて言つてたわよ？」

「え、あ・・・そうなんですか・・・。」

母と姉が突然出かけることは、もう昔からのことである。

「それでね、おばちゃんもお誘いしてもらつちやっただの。だからあっちゃん、家に泊まつてくれないかな？」

「えっ・・・？」

これは予想外。

「で、でもそんな」

「あら、遠慮なんていらないわよ。昔から毎日のようにお互いの家に泊まつてたじゃない。それに、あっちゃんがいてくれたらおばちゃん安心だわ。」

「明純、泊まるの？」

なんだこのダブル攻撃。

僕は一応微笑んでみるものの、内心困り果てた。

確かに前まではお風呂も泊まりも普通だった。

だけど菜月を好きになってから変に恥ずかしくて、なかなかできない。

「あ、お風呂上がった？」

背後から突然母の声が聞こえて、俺はビックリして振り返った。

「か、母さん。なんで急に旅行なんて・・・」

「あら、前から言ってたじゃない。行くかもって。」

「不確かじゃないか。」

「何よアズ、あんた女3人のんびり楽しんできちゃダメだって言うの？」

姉まで参加してきた。

もうどうしようもない。

「・・・楽しんできてね。」

やったと、姉と両家の母が手を取り合って喜ぶ。

「じゃ、よろしくね」

そう言っって3人はリビングを出て行った。

僕の家も菜月の家も片親だし、好きなことくらいしても良いと思っている。

だけど・・・なぜ・・・

「一緒に寝ようね？」

「う、うん・・・。」

なぜこの可愛い生き物を置いていく？

昔から菜月と僕はセットで、菜月の世話は僕がしていた。だけど今は状況が違う。

・・・でも・・・

「ま、いつか。」

いつも通りにすれば良い・・・か。

寿命が縮むかもしれないが。

#・5

「ほら菜月、こぼしてるよ？」

「んむゝ．．．眠たいゝ」

僕もだよ。

と思ったが言わないでおいた。

昨日の夜　．．．

母たちが出て行ってから菜月が僕を部屋へ引っ張りこみ、トランプだのテレビゲームだの色々した。

その内、菜月がうとうとしだした。

「あ、ちよつと菜月．．．」

倒れ掛かってきた菜月を慌てて支える。

「眠たいの？」

つて言つてもまだ10時だけど．．．

「．．．んー．．．」

目がほとんど閉じかかっている、コントローラーを持つ手にも力が入っていない。

「眠いんでしょう？．．．もう寝る？」

「やだあ．．．」

菜月はそこだけはつきりと答えた。

「やだつて．．．でももう半分寝かかって」

「だつて明純が．．．」

僕？

「明純が．．．いるから．．．」

「っ？！」

思わず赤面してしまった。

いきなり何を言い出すこの子は．．．。

「だ、大丈夫だよ。まだいるから。」

「．．．ホント？」

寝ぼけているのだろうか？とろんとした顔で僕を見上げてくる。

『うん。だって』

『ずっと……一緒に……い……て……』

……え？

菜月はそのまま眠ってしまった。

固まった僕の耳には、菜月の寝息と、ゲームの音。

『……どういう意味……？』

訊いてみるが、もうすっかり眠りに入ってしまったていて何の反応も示さない。

僕は心配になるほど軽い菜月を抱き上げ、ベッドに入れた。

布団をかけて離れようとすると、服の袖を掴まれた。

『なに……え？』

菜月は眉根を顰め、寝ているはずなのに今にも泣きそうな顔をしている。

僕はすぐに『一緒に寝ようね』と約束したことを思い出し、菜月の隣に寝転んだ。

するとすぐに菜月は僕に抱きついてきた。

顔がかつと熱くなり、鼓動が早くなった。この熱と音で菜月を起こさないだろうかと心配になるほどに。

僕の胸元にある菜月の顔を見ると、さっきとは打って変わって、幸せそうな顔をしていた。

『……あ……ず、み……』

むにやむにやと僕の名前を言う姿が可愛くて、僕はそつと頭を撫でた。

……あのこと、覚えているだろうか。

僕は思い出すだけでときどきしてしまう。けれど菜月はけろつと・

・は、していなものの、寝ぼけた顔はいつも通りだ。

よし、訊いてみよう。

「な、なあ菜月……」

「ん？」

パンを喰えたまま、また寝そうになっている。

菜月はかなりの低血圧なのだ。

「昨日の夜のことさ、覚えてる？部屋行ってから、しばらくして・・・」

菜月は首をかしげていたが、やがてはつとした顔になった。

「そういえば・・・僕・・・」

「うん？」

「ボス倒す前に寝ちゃった・・・」

「・・・。」

期待はしてませんでしたよ、はい。

「うむ・・・」

口を尖らせる菜月を見ていたら、なんだか可笑しくなってしまった。

まあ・・・良いか。

「明純」

「ん？なんだ？」

「コーヒー床に零しちゃった・・・」

「マジか?!」

とにかく早く起きてくれ、菜月・・・

暖かい日差し。寝不足な僕は思わずうとうととしてしまうが・・・

「あゝずゝみゝっ!」

やんちゃ坊主が寝かしてくれませんか。

「どうしたーっ?」

離れたブランコに座る菜月の元へ駆け寄る。

菜月は足をぶらぶらさせながら口を尖らせていた。

「どうした菜月?」

「アイス食べたい。」

「え、アイス?」

「それからチョコとおせんべいとアイスとチョコと」

「分かった分かった・・・」

昔からこうだから、ね。

「わあい」

さっきまでの顔はどこへやら、ニッコニコの笑顔を僕に向けてくる。

「早く行こーっ」

「うん。」

服の裾を引っ張られ、公園を出る。

「お金はちゃんと持ってきてるの?」

「うんっ」

道を歩きながらたずねると、菜月はズボンのポケットから小銭入れを取り出し、中身を手のひらにあける。

「はいっ」

ざっと見たところ全然足りない。

「な、何円あるの?」

「えっと・・・」

一生懸命数える菜月の真剣な顔に思わず見惚れる。

「・・・円」

こんなに小さいのに、どうしてそんなに突然綺麗な顔するのさ・・・  
「250円だつてば！」

ぼんやりしていると、突然大きな声がした。

僕がビクリして見ると、菜月が小銭ばかり乗った手を僕の方に差し出している。

「あ、ああそうなの・・・でも、足りないんじゃないかな？僕が足してあげようか？」

「あ・・・」

菜月が一瞬表情を無くして固まる。僕は首をかしげた。

「ん？なに？」

「・・・うつん、なんでもないつ。足してくれるの？！」

また笑顔に戻り、そう訊いてくる。僕が「いいよ」と答えると、嬉しそうにスキップし始めた。

しばらく歩くと、やがてコンビニが見えてきた。

中に入って、菜月の後を追ってお菓子のコーナーに向かう。

「あれ？吉田？」

声がしたほうを向くと、同じクラスの男子が何人かいた。

「あれ？何、この辺？」

「うん。少し歩いたところ。」

「あーっ、吉田君だあ。」

また別方向から声がする。振り返ると、数人の女子がいた。

「たくさんいるんだね。今日何かあるの？」

「なんかここの隣町で祭りあるらしくてよー。」

「へえー・・・」

そうだ。そういえばお祭りがあることをすっかり忘れていた。

「明純？」

お菓子のコーナーから、幾つかお菓子やアイスを抱えた菜月が出てきた。

「よっ。岩田も一緒か。」

「なんだよ岩田、大量だなー。」



「きゃー岩田君可愛い」

「頭撫でる」

女子が菜月の頭を撫でたりしている。

背が低いのと顔が可愛いために、女子にはけっこう菜月を小動物みたいに扱う子達がいる。

僕はそれを見て少し・・・いや、けっこうイラつとした。

「吉田もさー、大変だな。」

「岩田のお世話係みたいになってるもんな。」

男子がそんな感じのことを話しかけてくるが、僕はイライラに邪魔されてよく聞こえず、「ああ」とだけ答え、菜月の腕を引っ張った。

「ほらおいで。じゃあね、みんな。」

「おうっ。じゃあな。」

「ばいばい。」

その時僕は、菜月の表情にまったく気が付かなかった。

僕はずんずん歩いた。

ここは駅が近いので、祭りに行くらしい人がちらほら見えたりした。無性にイライラする。こんなに怒りに似た感情を覚えたのは・・・そういうえば、今までにも何度もあった。菜月が誰かに頭を撫でられたりして、笑っているとき。僕以外の誰かと喋って、楽しそうにしているとき。

僕の中に安心して見守る気持ちと隣りあわせで、もやもやとしたものがあつた。

それは僕をイライラさせるもので、嫉妬なのだと今ようやく思い立つ。

菜月の家に着くと、僕が鍵を持っていたので開けて、中に入った。

菜月の部屋に上がる。

そこでようやく、僕は菜月がヒトコトも喋っていないことに気がついた。

「菜つ・・・き・・・」

振り返るが、そこに菜月はいない。

台所にアイスを置きに行ったのだろうか・・・？

菜月が、1人で？

僕は階段を下り、台所に入る。

「・・・菜月？」

菜月は台所にいて、暗い中でアイスを冷凍庫に入れていた。

「電気つけないのか？」

僕は訊きながらスイッチを押す。

菜月は泣いていた。

「どうしたんだ菜月？！」

僕は慌てて駆け寄った。

菜月は肩を揺らしながら冷凍庫の扉を閉め、チョコなどを流し台の

下に入れたした。

僕は恐怖と同種の不安にかられた。

「・・・菜月・・・?どう」

「あず・・・は・・・」

嗚咽を漏らし、菜月が口を開く。

「ん？」

「僕・・・が・・・面ど・・・なの？」

「・・・え？」

とんでもない言葉が飛び出す。

「ど、どうしたんだよいきなり？」

「だ・・・て・・・さっき、コンビニ・・・で・・・言ってた・・・」

僕はコンビニでのことを思い返してみる。

「・・・菜月・・・分からないよ・・・教えて？」

「っ?!」

菜月が目を見開いて、真っ赤な顔を僕に向けた。

そしてキツと僕を睨み付けて、台所を走り去った。

「菜月！」

僕は慌てて追いかける。2階の方で乱暴にドアが閉められる音がする。

駆け上がって、ドアを開けようとする。

「だめ!!」

中から涙声で、菜月が叫んだ。僕の手が止まる。

「・・・明純・・・入っちゃダメ・・・」

すぐドア越しに聞こえる言葉に、僕は大人しく従った。

中から聞こえる嗚咽に、ギリギリと胸が締め付けられる。

僕は少しドアの前に座って、待つことにした。

どれくらい待っただろうか。

待つ時間というのは実際過ぎた時間よりも長いものだけれど、事実僕は30分近くドアの前に座っていた。

いつしか菜月の嗚咽も消える。

「・・・菜月？」

僕は声をかけてみた。

自分でも驚くほどの弱々しい声に、菜月からの返事はない。

「・・・入っても良いかな？」

泣き疲れて寝ているのかもしれない。

もしそうなら、ドアのところで寝てしまっているのかも・・・風邪をひいてしまう。

「コンビニで・・・」

立ち上がり、ドアノブに手をかけたとはほぼ同時に、菜月の鼻づまりの声。

耳を澄ませる。鼻をすする音と、大きく息を吐き出す音。

「吉田も大変だなんて・・・お世話係みたいって言われたときに明純、ああって答えてた・・・。」

僕は自覚できるほど目を見開いた。鼓動の音が体中に響いた。

あの時、聞こえた言葉の意味を理解せずに曖昧に返事をしてしまったことが、ここまで菜月を・・・

「・・・ごめん菜月、あの時は」

「今日だけじゃないよっ」

菜月の叫びに、言葉を失う。

今日だけじゃ・・・ない・・・？

「最近、明純おかしいよ・・・っ。いつもぼーっとしてて、僕と眼が合うと逸らして・・・前みたいに泊まってくれないし、お風呂も一緒に入ってくれなくて・・・僕が・・・面倒になった

の・・・？」

菜月の声が低くなる。

「僕・・・嫌われたの・・・？・・・もう一緒にいるの・・・嫌なの・・・？」

僕は思い切りドアを開けた。

菜月が慌てて振り返り、びつくりした顔で僕を見上げている。

僕は・・・僕は・・・

「好きなんだ。」

反動でドアが戻ってくる音が、変に大きく聞こえる。

上がった心拍数に邪魔されて、声も微かに震えている。

「・・・明純・・・？」

菜月が泣きはらした顔を、苦くゆがめる。

僕は狂ってしまいたくなるほど、悲しくなった。

傷つくのは自分だけで良いと思っていたのに、菜月を傷つけ、困惑させている。

だけど、想いは・・・言葉は止まってくれない。

「菜月のことが好きなんだ！親友としてじゃなくて、恋愛対象で、菜月を見てるんだ・・・！」

菜月は固まってしまっている。だけど僕は喋り続けた。

「・・・困るかもしれないけど僕・・・いつからか菜月を、1人の人として好きで・・・ただ僕男だし、菜月だって・・・そうだし・・・」

目頭が熱くなる。

自分が情けなくなってきた。

「でも・・・好きなんだ・・・菜月・・・」  
もう言葉が続かない。

菜月の視線を感じ、僕は顔を見られなくて、背けた。

しばらく沈黙が続く。

僕は少し落ち着いて、謝ろうと顔を菜月に向けなおすと、菜月は両手を広げていた。

「・・・手・・・」

菜月は小さく呟いた。

「・・・めいっぱい・・・広げてください・・・」

少し目を伏せ、続けてそう言う。

僕はよく分からずに、そろそろと腕を両側に開いた。

そこに、菜月が飛び込んできた。

僕は驚いて見下ろす。

見慣れた小さな頭があり、菜月はぎゅっと僕に抱きついていていた。

「はい・・・閉じてください・・・」

僕はゆっくりと腕を閉じる。

小さくて暖かな菜月を、そっと抱きしめた。

少しの間、無言になる。僕は緊張よりも絶望よりも、今はただ菜月の温もりに癒された。

「・・・これが、僕の答えだよ・・・」

顔を横に向けて、菜月はさらにぎゅっと力を入れてから静かに言った。

僕はその言葉に、忘れていたんじゃないかと思った涙を流し、止めていたらしい息を大きく吐き出して、壊さないように力強く菜月を抱きしめた。

やっと・・・僕の腕の中に。

僕の大切な菜月が、大好きな菜月が、想いと一緒に、僕の腕の中に・・・

#・Fin

「明純っつ、林檎飴買って良いっつ？」

「ちよつと菜月、その力キ氷食べ終わってからにしないと・・・」

夕闇がせまる空。縁日らしい賑やかさの中で、僕は改めて菜月のす

ごさに苦笑いさせられる。

僕たちは祭りに来ている。

けっこう大きなお祭りで、出店もたくさんあるし花火も上がる。

「はいっ」

いつのまにか手に2本林檎飴を持っていた。

「ありがとう・・・」

僕はそれを受け取り、それから菜月の手を握りしめた。

「花火が始まるよ。」

「ホント?!じゃあ、早く行こ!」

菜月もぎゅっと握り返してきて、楽しそうな笑顔を僕に向ける。

僕たちは川原へと走り出した。

繋いだ手には、力を込める。

はぐれないように。

ずっと一緒に、いられるように・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2237d/>

---

僕が広げた両腕の中で

2010年12月30日01時20分発行